寧王康星全集

第十冊

室生犀星全集

第十卷

新潮社

室生犀星全集 第十卷

昭和三十九年五月二十五日 發行
昭和五十一年八月三十日 セット版

著者 室生犀星
發行者 佐藤亮一
印刷所 二光印刷株式會社
發行所 株式會社 新潮社
〒一六二 東京都新宿區矢來町七一
電話 東京03(二六六)五一一一(業務)
東京03(二六六)五四一一(編集)
振替 東京 四一八〇八

(全十四冊セット) 定價 四九、〇〇〇圓

新宿加藤製本株式會社

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付

室生犀星全集　第十卷

編纂

三好達治
中野重治
窪川鶴次郎
伊藤信吉
福永武彦
奥野健男

題字

西川寧

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第十卷　目次

小説

杏つ子……九
めたん子傳……二〇九
横着の苦痛……二二二
舌を嚙み切つた女……二三五
藝術家の生涯……二四七
陶古の女人……二五八
鴉……二六九
夕映えの男……二八〇

小

說

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

杏つ子

血統

蟹

小説家の平山平四郎は、自分の血統については、くはしい事は何一つ知つてゐない、人間の血すぢのことでは、たとへば父とか母とかを一應信じて見ても、わかい父が何時何處で、どういふ事情で何をしてゐたかは、判るものではない、父親といふ名前の偉大さは、何も彼も匿してしまはなければならなくなる。父親は子供がうまれると急に立派な人間面をするし、どんな正直者でも、うつかりしたことを喋らなくなる。父親のわかい日の匿し事のなかで、或る時に關係した女がゐても、それは父親の死んだ後でも判らない、そのくらゐ一日の行狀が血統のうへでどういふ不幸な現はれがあつても、うはべでは誰も知る事が出來ない、恐ろしい事である。

人間は或る地位に達すると、たとへば家庭の父親であつても、大臣とか高官とか、えらい音樂家になつても、時々、彼自身の地位とか名譽とか信頼とかを、或る日には美事に叩き潰して出直す必要がある、得體のわからない仲間のなかに、自分を見さだめることで、さらに人間といふものを建て直して見たいのである。

小説家平山平四郎といふ人間の素性も、その血統にいたつては、一生つながれてゐる犬にくらべて、犬の方がよほど正しいと見た方がよい、一人の人間の素性をあらひ立てて見ることは、この物語ではぬきさしならぬことなのだ、平四郎はどうして生れたかといふことは、やはり一人の人間の生きることが、必要であつたかなかつたかを意味するものである。

北陸道の曲りくねつた小さい都會金澤も、西北の郊野をう

しろにした、ひよろ長い町裏に、足輕小畠彌左衞門の屋敷があつた。家祿二百石の足輕組頭は畠に果樹を植ゑ、野菜を作つてやつとその日を暮してゐた。女中のお春は今夜も二振りの佩刀を抱へて、だいぶ永くかかつて長町の刀屋から、金に替へて戻つて來た。家祿からはなれた武家や足輕らは、毎日賣り食ひするより外に、飯の食べやうがなかつた。

お春はあと二た月で出産だつたが、今夜もその赤ん坊の始末を、どう片づけるかに彌左衞門との間に話し合つた結果、お春が金の用意をしに行つて來たのだが、二十圓といふ金を前に置いて、彌左衞門は蟹のやうな悲しい顏付で言つた。

「町の入口に青井といふ變な女がゐるね、あれは貰ひ子なら、幾らでも貰ふといふ話ぢやないか。」

「けれども、あれはお金が見込みで子供がどうなるか分りはしません。」

「それなら金を付けてやればよい。」

あなたは簡單にさういふが、女の身ではせめて一年くらゐ赤ん坊は手元に置いてから、出すやうにしたいと何時もの、愚痴になつた。毎晩おなじ愚痴のくりかへしになり、彌左衞門はだまり込むと、それきり話は途絶えてしまつた。

卵のあかり

彌左衞門は毎日杏や枇杷、巴旦杏を吊し籠に入れ、大橋を渡り大通りを突つ切つて、市場に賣りに出掛けるのだが、町の入口にある青井の前をこのごろでは、注意ぶかく、二人の姉弟らしい子供が遊ぶのを見て通つた。着物にも、頭髪のぐあひにも、餘り構つてゐるふうがなく、ときには、その子供を呼ぶ烈しい癇性の女の聲が通りにまで、つんざいて聽えた。身長のある彌左衞門は見かけは立派だつたが、市場通ひは佩刀の時とちがひ、みすぼらしいものであつた。

青井のおかつは隣の寺の住職とつれあひ、別の表はしもたや作りの控へ家に住んでゐた。いまの姉弟も貰ひ子であり、乳母をつけて育ててゐたが、彌左衞門は人をやつて赤ん坊を一人貰つてくれないかといふと、乳母の用意もあるから、餘り月日が經つと、母ごは手放しにくいであらうから、直ぐにでも貰はうといふ返事を聞いて、彌左衞門はそれは重疊と喜んだが、お春は直ぐにでもといふ言葉に懍乎とした。

彌左衞門の長男の種夫は、近村の小學校長を勤めてゐたが、彌左衞門と女中お春との關係を知ると、家に戻つて來なかつた。だから、赤ん坊はお春のお腹から出たら、すぐにでも何處かに出さなければならないのだ、彌左衞門は市場で果實類を賣ると、その金でおなじ市場で魚や穀類を自分で買ひ、お春の腹が人眼にさはる時分から、外出を控へさせてゐた。

市中には食へない武家くづれ共が、天蓋をかむり、袈裟錦の襟飾りを垂れ、白綾の僧帶をしめ、漆塗りの派手な履物を

はいて、尺八を吹いて歩いてゐた。まだわかいお春の眼はそれらの虚無僧姿を見て、その翌日にはすぐ黒塗りのはき物を買つて、はいて嬉しがつた。小さい置時計を時計店でちらと見ただけで、印籠と白鞘物とを持つて行き、金に換へて時計を茶棚の上に飾つて置いてゐた。この愛すべき時計はお春になにか祕密を話しかける、こまかい、いぢらしい言葉を生きてたくさんに話しかけてゐるやうであつた。

お春は鶏を飼ひ、鶏小屋を作つた。

彌左衛門が何故鶏を飼ふのかと訊くと、お春は十七くらゐの女の子が笑ふやうに、顔一杯に笑つていつた。

「青井に赤ん坊をやつたら、卵をとどけてをばさんに食べさせてあげるのです。」

砂糖をためてゐる甕には、少しづつではあつたが、砂糖は食み出してゐたし、畠の青みかんだけは賣つてくださるなと、お春はいひ、冬は青井に持つて行く物がなくなつた時の用意に、取つて置きにしますと眼をほそめていつた。

女の子が生れた場合に彼女のわかい時分の着物をとき、下駄まで押入にしまひ込んで、持たせるのだと言つた。彌左衛門はこの女にいままで見ないものを毎日眺めた。櫛かうがいの類も、塗筐に入れ、まとめて、大きくなつたらみんな子供にやるのだといつた。

お　刀

彌左衛門には長男の種夫が、何時越して來るかも判らないし、お春の懐姙はともかく、出産のていたらくを見せたくなかつた。彌左衛門はお春の身の始末をしなければ家には入らぬことを、豫て種夫は腰強く言ひ張つてゐたのだ。だから彌左衛門はお春に目ぼしい金になる物、たとへば揃つた膳部に夜具類と茶器、衣類なぞも、いまの内に搬べるだけ搬んだ方がいいと言ひ、お春はなるべく人手を借りずに小物の皿小鉢から、寺町裏通りにある赤門寺といふ寺に、一部屋借りて其處に搬んで行つた。どうかすると、彌左衛門が風呂敷包を背負ひ、お春が手に提げられる小物を提げて、さびしい藪つづきの町うらを通つて行くと、お寺の灯しびが藪の奥の方に見えた。

「わたくし達は盗んで品物をはこんでゐるみたいね。」

結局、赤ん坊がうまれると、いまの家を立ち退いて、此の赤門寺に越して行かねばならない、それほどに、搬ぶ品物に、さういふ躾を受けてゐるやうだつた。お春は藪疊のまん中で、こんな盗みをするみたいな荷物搬びは、いやだといつて、だだをこねた。彌左衛門はわかいお春に、では、お前がいやなら、おれが明晩から搬んでやるといつた。お春は何時までも、この藪の中から歩き出さうとしないで、しがみ付い

て、彌左衛門が困り切つてゐるのを見て、わざとしてゐる困らせ方に思はれ、彌左衛門はこの女を持て餘して、抱いたまま、ぢつとしてゐた。

彼女はなりの高い彌左衛門の胸のところで、甘えて言つた。

「わたくしお刀がもつとほしい……」

お春は翌晩、自分で抱へきれない大刀を風呂敷につつみ、彌左衛門に見送られて攤んだ。一たいに長身の彌左衛門は二尺五寸以上の長刀ばかりを佩いてゐて、お春がそれを抱へて出かけるのに、鞘にひそむ刀身のきらきらしたものまで感じて、彌左衛門はお春のすがたをかひがひしく、なまめいて眺めた。實際、すぐ、まとまつた金になるものは、値は下がつてゐても、刀ばかりだつた。

夏が來てお春は男の子の赤ん坊を生んだ。

赤ん坊はやせて、みにくい、彌左衛門が蟹なら、赤ん坊はその蟹の子の子蟹であつた。

一と月と經ない間に、何處から聞いたか青井の家から使が來て、赤ん坊を早速にいただかう、幸ひ乳母が村の方から泊りがけに來てゐるから、今日からでも引取らうといつて來た。

お春は彌左衛門が何といつても聽き入れない手剛さで、赤ん坊を放さなかつた。

「厭、厭。」

やせた赤ん坊は餘りに泣き立つので、おへそから血がにじんで頭がむやみに熱かつた。彌左衛門は赤ん坊の泣く聲が、隣家にきこえはしないかと、暑いのに早くから雨戸を閉め、產婦は息苦しがつて開けて開けてと呼んだ。

赤ん坊

彌左衛門も餘りにお春が聞き分けがないので、一體どういふ考へなんだ、此方で育てられないことも分つてゐる筈だし、先方では乳母まで呼んで待つてゐるといふぢやないかと、彌左衛門もかつとなつた。

「あと三日すれば渡すわ。」

三日經つても、お春は暑いのにくるくる赤ん坊を包んで、渡しに行かなかつた。その次の日も、埒が明かず、お春はやせた子におむつを取り替へながら言つた。

「誰が人手に渡したりなんかするものですか。」

「そりや本氣で言ふのか。」

「本氣だわ、うそなんか言ふものですか。」

「おのれ、」

彌左衛門は恰度刀簞笥のある處に立つてゐたので、跼むとさつとその大抽斗を開けると、手にあたつた刀を一本ざつくり取り出して、それを一呼吸に鞘をはらつた。そして彼は呼吸せきながら言つた。

「赤ん坊もお前も殺つて了ふ、おれも腹を掻き切る。」

つひぞない事なので、お春は逃げようにも腰が立たないし、身動きが出來なかつた。そして今日ほど彌左衛門の背丈がこんなに高いとは氣づかなかつた。鴨居に頭がすれすれだつた。

「赤ん坊をやるか。」

「明日きつとお渡しします。」

やつとお春はこれだけ言へたが、彌左衛門の刀身の先が次第にふるへて來て、疊のうへに、だらりと下がつた、彌左衛門はすごすごと刀身を鞘にをさめた。

「どうせ縁のない子なんだ。」

お春はだまつて時計を見た。

日沒にはまだ殘照があつた。風呂敷包には仕立てた着類に、例の守りの小脇差と、買つて置いた幾足かの草履や下駄までつつみこんだ。

「いまから行く氣か。」

「何だかきふにけふ渡さないと、もう渡す決心がつかないんでございます。」

「さうか、よく決心してくれた。」

彌左衛門も手傳つて荷作りしてゐると、そこに、青井のおかつがちかに話をきめようと、玄關の戸を軋らせて這入つて來た。彌左衛門はいまからお伺ひするのだと言ひ、保育料の紙包をおかつに手渡したが、おかつの機嫌はすぐ直つた。

「人眼があるから裏通りを行きませう。」

町裏に大河があつて、町家の裏口が共防添ひに列び、其處の堤防を突き當ると、青井の裏口になつてゐた。

「おとんちやん、赤ん坊が來たよ。」

奥からおとんちやんと呼ばれた、日にうまく焦げたやうな顔があらはれた。眼がほそく柔しさうだつた。お春はこれが乳母だと思ひ、よい乳母らしいなつこさを覺えた。

「ほら、これが小畠の赤ん坊だよ。」

ひよいと簡單な手つきで、おとんちやんに赤ん坊を手渡した。

寒い乳房

茶の間に通ると、もう、胸をはだけたおとんちやんの大きい乳房に、赤ん坊はしがみ付いてゐた。お春は風呂敷包をといて、當座の着類とおむつをならべたが、青井のおかつは草履と下駄を見ると、赤ん坊に草履はまだ早いと笑つた。

「お前、これ履けるか。」

これも貰ひ子らしく、膝を列べてかしこまつてゐる姉弟の男の方に、下駄と草履を見せて言つた。

「履けるよ。」男の子は嬉しさうに言つた。

女の子に草履をはかせて見てから、草履はお前にやると、

おかつは更めてぞんざいに言つた。二人の子供は下駄と草履を一揃へづつ、膝の前に置いて、やはりかしこまつてお春の顔を不審さうにながめてゐた。彼方に行つてもよいとおかつがいふと、やつと此の姉弟は茶の間を出て行つた。その四角張つたきびしい光景は、お春へのつら當てにさう見せてゐるやうにうけとれた。

「名前をつけておありですか。」

「平四郎とつけてございます。」

「平四郎ちやんか。わたしやお武家樣だからもつと立派なお名前かと思つた。」

お春は、お腹の上まで赧くなつた。

この平四郎と名付けられ、ねずみの子のやうにぐにや・ぐにやした赤ん坊は、その時、熱いおしつこをもらした。おとんちやんはそれを手際好く始末をし、お春はあやまつた。彼女は別の包からためてあつた例の卵を、おとんちやんに、精分がつくから召し上つてくれと、押しやつて言つた。

突然おかつは何が氣に咎めたのか、立ち上ると納戸から、外からも數の判る卵籠を持つて出てくると、言つた。

「おとんちやんには、ちやんと卵は食べさせてあるんですよ。」

殊更におとんちやんに卵をすすめたのが、氣に障つたらしい、お春は濟みませんと、また頭を垂げた。

お春は、ではなにぶん宜しくたのみますと言つて、裏庭から例の堤防添ひに出て行つた。夏の永い殘照はまだあつて、先刻の子供の男の方が大河の洗ひ場の石段で、なにか石に摺りよせて洗つてゐた。

お春は棒切れで、その灰吹の中をぐるつと洗つて遣り、この男の子の着付の前はだけを直して、一緒に石段をのぼつてさよならを言ひ、堤防添ひに戻つて行つた。

お春はからからになつた大河の乏しい水を見て、喉が乾いて、なにかわすれ物をした感じで、乳房にぞくぞく寒氣が感じられた。彼女は赤ん坊の臭ひを自分の襟のあたりにかいで見て、赤ん坊は大河の向う岸にゐて、瀨波のなかで、ぎやあ・ぎやあ泣きわめいた。赤ん坊・平四郎はふにや・ふにやしたねずみの子ではございません、河から泣く筈がない、……彼女ははじめてこの大河に抵抗するやうに、優しく睨んで見せた。

不義密通の餓鬼共

お春はなにかと、がつかりした語調で投げ出して、よく溜息交りで言つた。

「とうとう赤ん坊は取られちやつた。」

お春は町に使に出ると、蛤坂といふ坂の上にある、寫眞館の硝子入りの額に、ながいこと見入つた。明治二十二年代の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com